

教職支援室便り（8月号）

令和2年 8月 7日（金）

文責：教職支援室 曾我文敏

☎0985-20-4808

教員採用試験（第一次試験）終わる

第一次試験が終わりました。学生の皆さんは、それぞれ緊張感の中で、試験に臨まれたことでしょう。また、試験に際して、これまで、積極的に筆記試験等の対策に取り組んできたことは、心の拠り所になったと思います。昨年10月から本年7月中旬にかけて、60コマ（1コマ90分）以上の勉強会に取り組むとともに、自宅等での自主学習に励んできたことは、何よりの財産です。試験結果は気になるとは思いますが、「やれるだけのことは、すべてやった。」という自信を、大切にしてほしいです。

そして、現在、二次試験対策の勉強会も第3週に入りました。学生の皆さんが、コロナウィルス対策を徹底しながら、週計画として「15コマから20コマ」のプログラムを立て、週ごとの課題を設定して、演習が行われています。私も、学生の皆さんと貴重な時間を、すべて共有しています。学生の皆さんの「やれるだけのことは、すべてやりたい。」という思いを受け、私自身も「やれるだけの支援は、すべてやりたい。」という思いが、更に高まっています。

今回の教職支援室便りは、学生の皆さんの採用試験に取り組む姿勢を軸としながら、勉強会の真の目的などについて述べたいと思います。

なお、第一次試験の結果については、9月号でお知らせします。

採用試験を受験しての感想

★ 去年の秋から始まった勉強会が、昨日のことのように感じられるくらい、すごく濃い数か月を過ごしました。本番は、自信をもって正解だと言える問題、自信のない問題、いろいろありましたが、今までやったことのある問題は、「やれた」という手ごたえです。今まで生きてきた中で、1番勉強したという自信はあります。そして、何かの目標のために、一生懸命やることの楽しさを実感しました。

★ 一次試験を終えての感想は、100%出し切れたかなというものでした。10月から勉強会が始まって、特に3月末から本気で勉強してきましたが、人生で1番勉強した自信があったので、本番はあまり緊張せずに解けました。今回、一次試験を突破できなくても、「周りは、もっとやっていたんだ。」とすることができます。試験では、勉強会の資料に関する内容が出ていたので、勉強会に参加していてよかったと、すごく思いました。ありがとうございました。

★ 試験の前日、当日の直前まで勉強してやり切ったはずだったのに、終わったときには、正直、手ごたえがありませんでした。でも、次第に時間が経つにつれて、問題を見直してみると、勉強会で取り組んだことが出ていたので、自分のもっている力を出し切れたと思いました。ここまでがんばれたのも、一緒にがんばってくれた友達、支えていただいた先生方のおかげだと思いました。この気持ちで、二次試験に向けてがんばります。

採用試験勉強会の真の目的とは何か

採用試験勉強会については、例年、10月上旬から翌年の9月上旬にかけて、約1年にわたり行っています。その間、一次試験に向けて「教職教養、専門教養など」、二次試験に向けて「面接、集団討論、模擬授業、小論など」の演習を重ねています。

この勉強会を進めていく中で、私が毎年感じることは、「勉強会は、採用試験に合格するためだけに行っているのではない。」ということです。もちろん、合格することが目的であることは間違いありませんが、その他に合否に関係なく、学生の皆さんが自分たちの力で、大切なものを育てている機会となっていると考えます。勉強会をほとんど休むことなく、熱心に取り組む学生の皆さんが多くいることは、私にとって何よりの喜びです。毎年、「この人たちのために、できる限りのことを支援したい。」という気持ちになります。

それでは、学生の皆さんが育てている、大切なものとは何なのでしょう。それは、人としての内面的な資質（誠実さ、協調性、コミュニケーション力、学び続ける姿勢など）や、教員としての専門性の基礎（児童生徒理解への意欲、授業力向上への熱意など）です。教職教養の勉強会から始まり、専門教養、面接、集団討論、模擬授業、小論などの演習に至るプロセスの中で、それらが培われていると強く感じます。特に7月に入り、学生の皆さんの言動からは、学校現場で業務を遂行するためのエネルギーが体感できます。現実には、勉強会に参加しなくても合格する人がいるかもしれませんが、しかし、勉強会に真摯に取り組む皆さんは、これからの教職人生において、本年度の合否に関係なく、必ず自己の資質を更に向上させ、自己実現を果たしていくと信じます。私は、これまでの教職人生を振り返りながら、このことに確信を持っています。

現在の勉強会・状況報告

模擬授業



【小学校・模擬授業の様子】



【中学校・模擬授業の様子】

7月20日から夏季勉強会が始まり、毎日模擬授業に取り組んでいます。受験校種（小学校、中学校）によりグループを編成し、それぞれの課題を踏まえながら、実践的な演習が行われています。本年度も、模擬授業の目的、評価の視点、評価項目、面接官の試問例、留意事項等についての、オリエンテーション（プレゼンテーション）からスタートしました。

模擬授業の中で、特に支援していることは教材解釈です。模擬授業の回数をこなすだけでなく、各教科の教材の見方・考え方（指導のポイント、魅力やおもしろさ、むずかしさ）等を助言することが重要です。この取組は、模擬授業を目的化せず、それぞれの校種の教員に係る資質能力（授業力）につながることを期待してのものです。具体的に小学校の国語科で言えば、「詩、

物語文、説明文、作文、俳句」などの教材解釈を通して、授業の楽しさを体感するという事です。中学校の英語科については、本学の英語科の先生に指導助言をお願いしています。学生の皆さんには、日を追うごとに、模擬授業力向上への意欲の高まりが見られ、発言にも深まりが感じられるなど、力を付けているのがわかります。



集団討論



【集団討論の様子】

集団討論のオリエンテーション（プレゼンテーション）では、その目的、評価の視点、評価項目、面接官の試問例、留意事項等について説明した後、具体的な討論テーマをもとに、討論プロセスとして、4つの発言段階を提示しました。それは、「第1段階～論点に対する発言（論点を整理する発言）、第2段階～論点を整理する発言（論点に対する発言）、第3段階～討論を深める発言、第4段階～討論をまとめる発言」です。そして、テーマのもつ本質を見抜く力の重要性を、共通理解しました。討論が収束していく先には、テーマの本質があります。単に討論するのではなく、討論しながらそれを見抜いていく力を付けてほしいと願います。演習においては、教育問題や社会問題等に関する70の討論テーマを用意し、討論ごとにテーマのもつ本質について助言するようにしています。学生の皆さんは、討論を重ねるごとに、テーマに関して多面的・多角的な見方・考え方ができるようになり、発言内容も説得力のあるものになっています。



面接



【集団面接の様子】

面接のオリエンテーション（プレゼンテーション）では、2つの人物評価の視点（①教職への情熱、人柄、適性等、②教職教養に関する知識・理解）について、試問例を示しながら解説しました。全国的な傾向としては、①教職への情熱、人柄、適性等についての試問（通常試問）が多く行われています。しかし、②教職教養に関する知識・理解（教職教養試問）を取り入れている自治体もあることから、受験自治体によっては、教職教養試問も交えて演習しています。また、本年度は、試問数207で構成される試問集を用意し、演習に役立てています。

ていたこと、四十銭をもらったときの罪の意識、その後も日夜自責の念で苦しんでいたこと、月給をもらおうと汽車に飛び乗るようにしておばあさんをたずねたこと、今もなお、悔恨の念や後悔の念を持ち続けていることなど、学習者としてその人間性を受け入れたい感情になる。

また、本教材にみられる「人間としての弱さ」は、主人公だけの弱さではなく、すべての人間に共通してもっているものであることを、生徒に気付かせることが重要である。それを基に、人はだれしも弱さをもっているが、それを乗り越える（乗り越えようとする）強さもあることに気付かせたい。本教材の活用の意図は、人には人としての弱さや醜さがあるが、それを乗り越えようとする強さや気高さもあることを、心情的にじっくり考えさせるところにある。

これらのことから、問題場面において軽々に「あなたならどうするか。」と発問することは、本教材の有効な活用とは言えず、主人公と生徒との間に大きな環境の違いがあることを考慮していないと考える。これまで長年にわたり評価されてきた本教材の価値を、十分に分析した上で活用したい。

指導においては、教材が長文であり一読では内容理解の困難な生徒がいることや、時代背景、小樽の位置及び気象環境、足袋などの知識を得て授業に臨むようにするため、「朝の活動」等を活用し、事前に教材を読む活動を設定する。

展開前段においては、まず、主人公とおばあさんとの四十銭のやり取りの場面を取り上げる。おばあさんの「五十銭玉だったね？」の言葉に思わず「うん。」と答えたとき、また「踏ん張りなさいよ。」と四十銭を握らせてくれたときの主人公の気持ちを、しっかりと考えさせたい。生徒からは、「四十銭があったら足袋が買える。」という反応が予想されるが、それで終わることなく、補助発問「人には、そのような弱さがあるのでしょうか。それでよいのでしょうか。」と問い、「人間としての弱さ」について、自分との関わりの中で考えさせ、自分たちにも主人公と同じ弱さがあることに気付かせる。（これらの発問等により「人間理解」、「他者理解」を図る。）また、ここでは、おばあさんが主人公のうそに気付いていたかどうかは、問題として扱うことはしない。そのことは、教材文に直接表現されておらず、真実は分からない。また、そのことは、「ねらい」への迫りにおいて、影響を与える要素ではない。「これで足袋を買って踏ん張りなさいよ。」と、おばあさんが四十銭を渡してくれたという主人公の思いがすべてである。

次に、自責の念で悩む主人公の気持ちを取り上げる。ここでも、生徒からは「どうして四十銭を受け取ったのか。」など、自責の念に関する反応が予想されるが、それだけで終わることなく、主人公に共感させる補助発問を投げかける。補助発問1「おばあさんのどんな姿が、頭に浮かんできたのでしょうか。」では、おばあさんの表情、声、姿勢などを多面的・多角的に考えさせるようにする。補助発問2「そこまで、自分を責めなくてもいいのではないですか。」では、主人公の思いに共感しながら、その人間性のよさを認め、徐々に「ねらい」に迫っていくようにする。

展開前段の終わりにおいては、「自分に腹がたってしょうがなかった。」「くだものかごを、川に落としてやった。」をおさえながら、泣けて泣けてどうしようもない主人公の心情を、その辛さに共感しながら考えさせたい。その際、教師は「そこまで泣かなくてよいのではないですか。」などをつぶやき、おばあさんの存在がなくなったことを、どうしようもできない現実（自分の罪を償えない現実）として、受け止めている主人公を捉えさせる。そして、補助発問1「おばあさんは、どんな心をもっていた人だったのでしょうか。」、補助発問2「主人公は、どんな心をもっていた人だったのでしょうか。」により、おばあさんからもらった心を支えに、自分の弱さや醜さに決別しようとしている主人公の姿を捉えさせ、ねらいとする価値を把握させたい。